100日遅れの「公開シンポジウム」

自然・地域の再生を通して 教育の未来をきりひらく

東日本大震災のため中止せざるを得なかった「第 19 回全国教育研究交流集会 in 群馬」（民主教育研究所・群馬現地実行委員会共催）。その 1 日目に予定されていたシンポジウムが、6 月 18 日午後、前橋中央公民館（前橋プラザ元気 21）で開かれた。一時はごく小規模に公開座談会形式でとの考えもあったが（大浦現地実行委員長の経過報告＝写真）、公開シンポの受付が始まると順番を待つ人が引きも切らず、用意した資料も座る椅子も足りなくなるという盛況ぶりで、参加者は 56 名にのぼった。

「自然・地域の再生を通して教育の未来をきりひらく」という当初のテーマに「3．11 を体験して考える」という副題が加わり、改めて 100 日遅れの開催であることを実感。

コーディネーターは民研の運営委員で和光大学副学長の梅原利夫さん。3．11 後、津波で家を奪われ、原発事故のため放射能に追われて避難所で暮らす人々が、しばしば「ふるさと」という歌を歌って涙する光景を見た。

しかし今の日本には「うさぎ追いし山」も「小鮒釣りし川」もほとんど残ってはいない。それどころか私たちのふるさとは地震列島、津波列島、そして原発列島の上にある。そのような自然と地域を再生し、教育の未来を開くにはどうしたらよいかが本シンポジウムの意義だと改めて確認し、4 人のシンポジスト（パネラー）からの報告を受けた。

① **飯塚祥則さん（元・前橋市立小学校教諭）**

昨年 3 月退職。30 年以上携わってきた作文教育と学級通信を通じて結ばれた子どもや保護者との絆が今も続いている。最後の年に担任して現在 3 年生になったこはるちゃんは、宮城県で被災した伯父さんに宛てて「生きててよかった」という手紙を書いた。そのことを元の担任に知らせてくれる母親。姪の手紙に勇気づけられたという兄の返書も引用された「宝物」のような文章。大切なのは「引き出す」を超えて「受け止める」こと。ありのままに受け止めるのは引き出すよりも重く、深い意味がある。教師にとっては教室、学校という場、さらには家庭や社会全体が受け止めることで、よりよい環境が生まれる。それこそがすべての大人の責任、ひいては政治の役目もそこにあるのではないか。

② **松井孝夫さん（前・県立尾瀬高校教諭）**

尾瀬高校自然環境科の教室には黒板がない。めざすのは体験型の学習。1 年次では 3 年生の指導を受けながら野外実習の基本を学ぶ。2 年後には自分たちが下級生を指導するのだ。2 年生になると専門の研究者・技術者からボランティアをふくむ多くの外部講師から自然、環境について学ぶ。生徒たちは専門的な知識を得るとともに、講師の生き方に触れて人生を考えていく。教師はほとんど教えない。条件整備と写真を撮ったりの記録の仕事が中心になる。3 年生になるとガイド役。生半可な知識では相手（下級生）に正しく伝えられない。さらに何よりもコミュニケーション能力が必要とされる。

自ら学ぶ力をつけた生徒たちはやがてネットワーク作りに乗り出す。同世代の高校

生（自然・環境保護の問題意識を共有する）間の交流から始まり、やがては卒業後も母校との関わりを持続するため、10 年前に「自然環境科卒業生の会」を結成した。授業や課外活動での外部講師として活躍するほか、在校生のために様々な相談相手になり、さらには地域住民を対象とする諸々の活動を展開している。

③　布川　了さん（田中正造記念館名誉館長）

3月11日の大地震で足尾の源五郎沢堆積場が崩れ、堆積物がわたらせ渓谷鉄道の線路を埋めて渡良瀬川に流れ込んだ。古河はあわてて復旧に取り組んだが、町の中央にある最大規模の簀子橋(すのこばし)堆積場が崩壊したらどんな惨事が引き起こされるか。足尾鉱毒問題は今も終わってはいない。

今回の原発事故で東電は「想定外」だと言って責任逃れをしているが、過去の教訓から学ばぬ根拠のない安全神話が引き起こした人災である。1897（明治 30）年に渡良瀬川沿岸の鉱毒被害民が陳情のため東京へ押し出した際に歌った「鉱毒悲歌」にも、濃尾地震（91）や三陸津波（96）は天災だが、「鉱毒事件は人のわざ　人と人にて止むものを…」とはっきり区別している。同様に、東電は責任は免れることができない。

〈布川さんは 1925＝大正 14 年生まれ、田中正造研究は実に半世紀に及ぶ。多くのエピソードを交えたお話は次から次へと湧くがごとく、とても一人 20 分という持ち時間に収まりきれない。〉

④　朝岡幸彦さん（民研運営委員・東京農工大学）

哲学者の内山節さんは、1965 年を境に日本人が「キツネにだまされなくなった」と言う。高度経済成長以後、日本人は経済的豊かさと引き換えに自然への豊かな感性を失った。青少年の自然体験が大きく減ったことが影響しているだろう。「海や川で泳いだことがない」「トンボやバッタなどの昆虫をつかまえたことがない」子どもが大幅に増え、「太陽が昇るところや沈むところを見たことがない」子どもが 38%もいる。

スピヴァックの主張する「unlearn」という概念を、「学び捨てる」や「学び返す」と訳すより「まなびほぐす」(鶴見俊輔の訳。大学で学ぶ知識は必要だが、覚えただけでは役に立たない。まなびほぐしたものが血となり肉となる）ことが大切。これまで伺った群馬の実践にも学びながら、今こそ地域の「学びほぐす」力を評価し、教育の再生につなげたい。

複数のパネラーが報告すると、えてして問題が拡散し、シンポジウムとしての焦点がボケるきらいがあるものだが、今回はコーディネーターの梅原さんが事前に 4 人のレポートを熟読し、テーマに沿って的確な要約をしながら進めてくれたおかげで一段と主題が際立つ結果となった。

休憩後の質疑では、飯塚さんに「退職後も保護者たちとつながっていられるのはなぜ？」との問いに、「お母さんたちが集まりを続けてくれている。それは楽しいから。特にテーマも決めず、みんなが言いたいことを言い、結果として一人の喜びや悲しみがみんなのものになっている」。子どもたちや保護者の圧倒的な支持を集める「飯塚マジック」についての《証言》も出された。

「尾瀬高校の話を初めて聞いて驚いた。今の高校は大学への進学実績で評価される時代だが、進学校で尾瀬高校の実践を活かす途はあるのか」との質問には「今年４月に中央中等教育学校に転任した。とかくデキル子は本から得た知識でわかったつもりになる傾向がある。何よりも事実から学ぶのが大切だと伝えているが、これも高校受験というカベのない中高一貫校だからできることかも…」という松井さんの答が印象に残った。

（文責：内藤真治）